

移動する視点、 通路の彫刻

2024.7.16 [TUE]



10.20 [SUN]

展示替え 9.6 [FRI]

メトロ銀座ギャラリー

東京メトロ 日比谷線
銀座駅コンコース
B7・B8 出入口付近

移動する視点

この空間は、
多忙な人々・多様な目的の人々・様々な世代の人々が、
通り抜ける場所にある。「広場の彫刻」ではない、
「通路の彫刻」は可能だろうか。

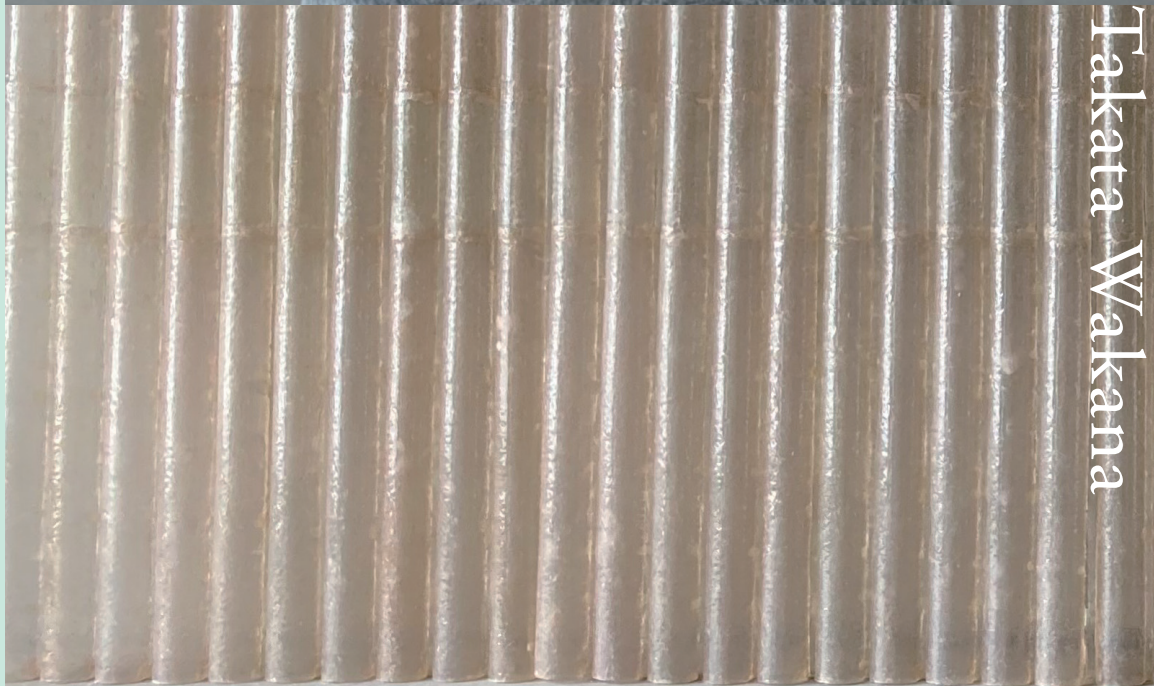
MMU

主催：
公益財団法人 しろ文化財団

企画監修：
武蔵野美術大学彫刻学科研究室



Sejiyo Ayami



Takata Wakana



Matsunaga Shoma

本展は、この場所（銀座）この空間（ガラスケース）から新たな彫刻の可能性を考える「実験」です。メトロ銀座ギャラリーの空間を念頭に、彫刻学科研究室がテーマを設定。個性豊かな表現者たちが、学生の中から出品作家を推薦する形で応答しました。多彩なアプローチから選ばれた作家たちは、この実験場で何を試みるでしょう。ここからはじまる、表現のかたちにご注目ください。

聖成 彩未



《軽快な鉄》2023年

略歴

2003年 千葉県生まれ。2024年「逸脱」武蔵野美術大学彫刻学科4年学年展 武蔵野美術大学（東京）。

作家コメント

ある時、薄い鉄板が地と垂直に立っているのを見つめていた。そのうっすらした黒ずくめの奴、力むことも眠ることもしないのに、私を支える必要は無いらしい。そいつの、理から抜け出した軽やかに夢中になりたい。もう少し覗いていると、黒ずくめは人目の付く通路で軽快にダンスをした。「鉄が浮いている。」呑気に、黒ずくめの嘘臭い噂。

推薦… 保井 智貴

空気みたいな鉄。聖城さんの作品を一言でいうとそんな印象がある。鉄を扱う彫刻家の彫刻作品は、重厚感と物質感を感じさせ、作者の思考性を強く全面に押し出したエネルギー溢れる作品が多いように思う。彼女の作品は、そのような趣は一切なく、誰も気に留めない鉄の隠れ持った性質を、静かに解放しているかのようだ。

その制作方法は、少しだけ独特である。地面に対して鉄板の水平垂直の組み立てによって作品の基盤を決め、一部の形体を異なる物質に変換する。その形体は鉄の青味がかかった色のみを残し、鉄と相反する柔らかで繊維質なフェルトを、事前に成形した発泡ウレタンの塊に覆い被せ圧縮する。そうすることで虚と実という関係の中で、作品全体のバランスを構成している。鉄板に残る作者の手後も、一見すると溶断した跡を従来の鉄の彫刻家のように、物理的な現象を美として捉え、そのまま残しているように見えるが、よく見るとほんの少しだけ角を落とし、丸みを出している。鉄板の面には所々研磨した仄かなグラインダーの跡が、作者の密かなメッセージのように見える。作品全体の軽やかな空気感は、その少しの視点や試みによって生まれる。

ではこの空気感は何処から来ているのであろう。作者の本質は、柔軟で軽やかな視点にある。だがその視点は明快な答えを出そうとしていない。見る側の眠れる記憶をゆっくりと呼び起し、時間と共に微かな光を徐々に認識させていくのだ。鮮明に捉えることのできない向こう側の世界へと軽やかに引き込む、その状況自体が作者のリアリティである。

高田 稚菜



《無題》2024年

略歴

2001年 東京都生まれ。2024年「2023年度武蔵野美術大学卒業・修了制作展」武蔵野美術大学（東京）。「2023年度第47回東京五美術大学連合卒業・修了制作展」（国立新美術館（東京）。

作家コメント

刷毛に樹脂を含ませ幾度も重ねていくと、少しずつかたちが浮かび上がってくる。一定の行為を繰り返すことは何かに祈りを捧げることものようにも感じられ、静かに感情的になっていく。それらを空間に置くことで、人の体内のような、中身のような、もっと内側のなにかを探ろうと思っている。なにかはまだわからず、いつも手探りをしている。

推薦… 細井 篤

高田稚菜さんは、自身の記憶の数々を手掛かりに彫刻を試みる。時折ふと現れては消えてゆくさまざまな記憶。確かに存在はする形なきもの。そして時としてそれらは、恍惚と痛みをもたらす。そんな言葉にすればこぼれ落ちてしまいそうなものを繋ぎとめる為に、彼女は流動する液体の樹脂を選び、表現の媒体とした。

着彩されず透けた薄い樹脂の面は液体から固体へと変化し、彼女の記憶の境界を指し示す彫刻へと変換させる。その透明な境界が浮かび上がった状態は、幾何的でありながら奔放な伸びやかさと揺らぎを持ち、どこか壊れてしまいそうに繊細で、毒々しい。そして他人の介入を阻むかのように凛として美しいのだ。反復し広がり続ける構造はとどまることのない時間と、目の前にありながらも遠い存在を見つめるような感覚に導いてくれる。

デザインされ洗練されたプラスチック製品に埋めつくされたこの街で彼女の彫刻の粗野で純粹ゆえの違和感は、行き交う人々にながしかの存在の意味を示してくれるだろう。

松永 祥馬



《BIRD(duckwatersurfacecormorantbrunchpigeon)》2024年

略歴

1998年 東京都生まれ。2023年「2022年度武蔵野美術大学卒業・修了制作展」武蔵野美術大学（東京）。2023年「令和4年度第46回東京五美術大学連合卒業・修了制作展」国立新美術館（東京）。「でんちゅうストラット—此処リアリズム」(小平市平櫛田中彫刻美術館（東京）)。清水多嘉示賞受賞。

作家コメント

1. 彫刻の全体を一度に見るのは不可能である。
2. 鑑賞者が彫刻の全体を把握するにはその周りを動かない。
3. 動くには時間が必要である。
4. 彫刻全体を把握している状態とは、動いた時間を思い出している時である。
5. つまり把握した彫刻の全体は、各々の頭の中にしかない。

この通路の中を人は運動している。その運動を作品にした場合、そこに含まれるどんな小さな感覚も作品を構成するものになりえる（と思う）。

推薦… 高柳 恵里

さて、「彫刻作品を見る」ということにおいて、果たして何が起きていると言えるだろうか。彫刻は単体の存在のようであっても、そのこと自体が揺らぐことも起き得る。例えばそこに、いくつもの異なる時間や、いくつもの異なる空間を意識することが出来る。それは、不安定で変化し続けるものかもしれない。それでは、異なる時間や異なる空間を一斉に受け止め、確実に決定的だと感ずる瞬間を得ることはできるだろうか。彫刻を体験するとは、そのようなことだろうか。松永祥馬は、様々な方法で彫刻のあり様を探り続けている。それは、自分を解体して周囲も解体して境界を動かし続けているかのようである。ふと思う。その姿勢は、問題が山積みの世界のあり方にとって、新しい何かをもたらすような可能性に繋がることかもしれない。

地下道を通り過ぎる人たちと、その目に一瞬映る作品のそれぞれが解体して混ざり合い、そこに生まれる瞬間の出来事、そこでしか起きることのない出来事のことを思う。そこが通路だからこそ、何かを気付かせて、通路の意味を際立たせることのできる作品がおそらく展開される。楽しみである。